
靈感持ちのアサシン

イルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

靈感持ちのアサシン

【Nコード】

N0607Z

【作者名】

イルカ

【あらすじ】

異世界って知ってるか？まあ有名だからな。

異世界転生、これも言葉ぐらい知ってる奴は多いだろう。中には経験者もいるかもしれない。

テンプレだと赤ちゃんからチートでのし上がるとか最強で勇者だったりするもんじゃないの？

なのに俺はアサシンだった男を乗っ取ってる。主に忠誠を尽くし間諜から暗殺まで、ってそれってニン（略）じゃない？でも火遁も分身もできない。

・・・まあちょっと靈感ってやつを持ってた一般人だった俺、これから一体どうしよう。

ブローグ

ブローグ

盛大に吹き出す鮮血、全身赤く塗れる俺。

眼前には首が半ば千切れたおっさん カッコ 王冠付き カッコ閉じる、首半ばまで切り裂いたナイフとそれを持つ俺。
えーと、何これ、さっぱり状況が掴めないんですけど？

俺は、千条寺天人、ほらそこ古臭いとか言わない。

現在二十歳、言いたかないけど浪人生（二浪）、丁度本命大学の受験で解答题に答えを書き込んでいる所だ。

親の反対を押し切って、推薦蹴つての二浪、肩身は狭いしもう今年落ちたら強制的にあそこに行かざる得まい。

そう佛教大学に。いや、だった。親の後を継いで坊さんとか絶対嫌だった。いくら適正があっても親の推薦があつて向こうの学長まで挨拶に来るほどであつても嫌だった。ケバイお姉さま方にモテモテなんて絶対嫌だった。

だから俺は・・・今年こそ絶対に受かってみせる。そしてエンジョイ大学ウハウハラライフを送るんだ！

突如、俺の耳に『ピロン』と携帯メールの着信音（のような音）が聞こえてきた。

誰だ試験会場で携帯OFFにしてない奴は。試験管とつとと摘み出してください。

と思つたけど、誰も反応しない。と思つたら目の前にミニチュアサイズの仏像が現れた。おいおいモンスターのエンカウント音かよ。

ええと、大日如来像みたいだな。

「天人よ、お前は今呪われた。後数時間で死ぬ。」

うお、仏像が喋った、って、え？

「少々手違いがあつてな。元々お前への呪ではなかったのだが、呪が強すぎたようだなあ、我々の世界より漏れ出したのが靈感能力の高いお前にちよつと引つ張られたようだ。」

なんかテンプレっぽいこと言ってるんですけど、俺関係ないじゃん。試験中だし！ここ受からないとやばいんだよ……あれ死んだら意味なくね？

「そうだ、お前は死ぬ。もうこれは変えれん。心配するな体はちゃんと大日如来たる我が天へ送り届けてやる。」

おいおい勝手な事言ってくれてやりますね。

「しかしお前の魂は惜しい、したがってお前の魂を我らの世界へ連れて行くことにした。」

お、これって転生つてやつこのフラグでしたか？興味はなくないがエンジニアジョイ大学ライフの方が……。あ、でも天国でウハウハライフ送れるならよくね？

「我らの世界は天国ではない。むしろ地獄でもないがな。来れば分かるろ。向ここの体はもう用意した。心配はあるまい。」

えっと、本当に死ぬの？変えられないの？

「無理だ。我に解けるほど甘い呪いではない。明日にはお前の寺で我が葬儀の主を務める事になるう。肉体は天国へ導いてやるから安心するがよい。」

つか、肉体は天国って言ってるんですけど、魂はどこに行んだ。大日如来様のいる場所は極楽浄土って呼ばれる所ですよ、天国じゃないの？

「我を作る想念では極楽浄土と呼ばれるな。思い描いている物とは違っただろうが、そう悪い世界ではない。安心するがよいぞ。」

想念ねえ。あまり良い予感はないが、絶対に死ぬなら仕方がない。そう割り切れる訳じゃないけど大日如来様の話は嘘ではないと俺の霊感がピンピンに伝えてくる。神仏だしな。

「そうか、納得してくれるか。では今より導く事にしよう。しばしの別れとなるが、あちらですぐに会う事になるうから心配する出ない。」

ポーン、ポーン、ポーン

鈴の音が鳴り響く。そして俺は確かに自分の肉体を離れる様子を見た。

当然、激しく激しく後悔する事になるのだが、後の祭りって奴だな。

プロローグ（後書き）

思いついたノリです。
並行してボチボチ書きます。

第一話 く状況を整理してみよう

転生した瞬間、俺は血にまみれた人生だった（肉体的にも精神的にも）

どんな罰ゲームだよ。

ともかく俺は目の前の王冠かぶったおっさんをナイフでぶち殺した所らしい。

ええと、これはどうすればいいんだ？

周囲を見渡す。アホみたいに豪華な調度品が大量にある部屋。

ちよっとした寺の住職の息子（長い）だった俺は、鑑定眼つてものが多少肥えてると思う。

だからそれほど価値を違えていないだろう。少なくとも、金と金メッキを間違っようなミスはないと言える。

ふむ、ここは中東の油田を持つ王侯貴族ばりに金持ちの部屋っぽい。王冠をかぶってるんだから王様なのかもしれないけど、キラキラしすぎて趣味は悪いな。最低だ。

次に王冠を見る。おっさんの顔はどうでもいいから見ないように努力する。

口から泡と血を吹いて白目で舌をだらしく出したまま逝ってる姿は見ていて楽しいもんじゃない。下は見る気も起きない。

俺も住職の息子として死体を見慣れてなければ耐えられなかったかも。

おーくわばらくわばら

・・・そういえばこのおっさんは殺されてるのに、怨念がない？見えない？なぜだ？

異世界だからだろうか。

いや待て、俺が来たのは極楽浄土じゃなかったか？
なぜそんな場所で殺人が起こっている（犯人は俺）

・・・まあ考えても仕方がない、詮索は後にする。

頭に乗ったままの王冠をしげしげ見る。

王冠の細工は素晴らしい。はめ込まれている石はサファイア・エメラルド・ルビーに琥珀か、しかもどれも粒が大きい。

ダイヤこそないが日本の首都圏に豪邸が建つかもしれしれない。
億ションに住めるのは確実だろう。

そついやこのおっさんなぜ倒れないのか、と思ったが理由は簡単だった。

ナイフが首に突き刺さったままで俺がそのナイフを持って支えているからだ。

うん、腕が疲れたから離そう。

ドサリ

重い音を立てておっさんは崩れ落ちた。

ナムアマミダブツ・ナムアマミダブツ

名前も分からない王様っぽいおっさんだが一応ご冥福をお祈りする。
俺のせいじゃないので恨まないでくれよな。

おっさんの事を意識の外に追い出して自分の事を考えてみる。

この体の元持ち主は何者だろうか？

怪盗とか義賊だったら調度品を盗んでその辺の貧民にでも配ればいいのか？

それ以前に、持ち主さんどこに行ったのだろうか？返さなくていいの

だろうか。

あゝ、あゝ、本日は晴天なり晴天なり。ただいま他心通のテスト中。千条寺天人君聞こえるかね？

胸元辺りから声が聞こえてきた。

懐をまさぐってみる（自分のだぞ）

黒光りして四角いものがあつたので取り出してみた。金色の文字が彫り込まれている。

つて、位牌じゃんこれ。んだよ縁起悪いな。

おっと、捨てるでないぞ。そこにその体の元の持ち主が封印されておる。呪いで

おいおい、すぐ捨てたくなつたんだが。

心配するでないわ。その者の精神が出てくる事はない。がお主がその体を自由に使うためには必要な物だ。こうして他心通が届くのもその者の力よ。

へー、体だけじゃなく精神まで使われるって報われないな。

そやつはこの世界でも悪名高きアサシンじゃった。呪いで封印されるまで、それは悪鬼羅刹のごとく殺しまくつておつたのじゃ。

このおっさんもその被害者か。可哀想に。

ともかくじゃ、そこはそろそろ警備の者が来る頃じゃ。ワシが誘導するゆえ脱出してくるがよいぞ。

それはありがたい。何が何やらまだ分からんが、この王様みたいな

おっさん殺しで捕まれば確実に死刑だろう。そんな事は御免だ。
大日如来の導きなら大丈夫だろうしな。

まずは、右手にある窓を開け外へ出るのじゃ。

右側を見ると、今の俺の視線の倍ほどもある窓があった。天井まで
推定4 m。

裕福な人の部屋って天井も高いんだよな。

カチャ、シュシュシュ（こすれる音）

思ったより可動部分も滑らかだな。よし、開けたぞ
窓から外を見ると広いバルコニーがあった。ジュリエットが恋人を
待ってるみたいない感じのあれだ。

そのまま外に出て窓を閉める。手すりのそばまで歩いていくと、個
々が相当高い場所だという事が分かった。
推定マンション8階相当（約20 m）たぶんだけどな。

では、そこから飛び降りろ

できるかー

第一話 く状況を整理してみよう(後書き)

主人公冷静すぎですかね。

まあアサシンですから。

第二話 く身体能力をチェックしよう

できるかー、と叫んではみたものの、向こうの扉から堂々と出ていけるような簡単な状況じゃないよな。

なんせ俺、王様っぽい人殺してるし、やったのは元の持ち主だけど。

「アルプレヒト王、どうなさいました？」

ウダウダしてる間に扉の外から声がかかった。どうやらさっきの叫びを聞き咎められたらしい。

日本語じゃないけど聞き取れるな。これも極楽浄土のテンプレだろうか。

いや異世界のテンプレというべきだな。

《ぼーっとしておって良いのか？見つかるぞ。早く飛ぶのだ》

おっと確かに見つかったらかなりヤバイので勘弁して欲しい。

しかし8階相当を飛ぶのはどう考えてもムリ、絶対無理。他のルート無いのかね。

あ、ほらこの部屋が王様の私室なら隠し通路とかありそうじゃん。

《その体の持ち主なら楽々こなしておったぞ。問題はあるまい。しかしどうしても無理だというなら仕方がないな。捕まってみるがよいぞ。容赦無く拷問された上、永遠の地獄へ送られるだろうかの、つくつく》

おい大日如来様だろ、何でそんなに悪の幹部っぽいの？

「アルプレヒト王、アルプレヒト王、いかなさったのですか、お

返事下さい。アルプレヒト王！」

ヤバイ、いよいよ部屋に入ってきたそうな雰囲気だ。

しかしこの高さから飛び降りたとして、普通は死亡、良くて大怪我で捕まって拷問されて死亡。

あれ？この場合、普通に死んだほうがいいの？

《やれやれ、しかたないの。下を見よ、少し出っばった所があるじやろ？そこを足場に水平にジャンプすれば、ほれ正面の屋根に飛び移れるわ》

言われて、再度ジックリ下を見ると、確かに4〜5mほど下に人が一人乗るには少し狭いぐらいの出っ張りがある。

しかし正面の屋根までざっと10mはありそうだ。飛び移れると言われても・・・

「アルプレヒト王、何事かおありですか？失礼致しますぞ。」

ガチャ

扉のノブが回される音がして、内開の扉が開き始める。

ヤバイ、見つかるまでの猶予は後5秒もない。

《ほれ、はよはよ。私の言葉を信じよ。ついでにその体の能力をもな。》

あゝ、もう仕方がない。何故か詐欺師みたいな大日如来の言うことでも、一応仏だ（そのはず）万一の成功にかけるしか無い。

俺は意を決し、手すりに足をかけるとダイブした。

丁度その時、後ろから

「アルプレヒト王、どうな・・・王、王・・・誰か医者だ、医者を呼べー」

なんてテンプレな叫びが聞こえた。良かったギリギリ見えなかったようだ。

という思考も秒に直せばコンマ以下。俺の体は落下をはじめてすぐに出っ張りまでたどり着く。

狭い足場の角に両足でうまく着地。

落下のパワーを消さないように下半身へ溜め込むと消えないうちに水平方向へ開放、ジャンプする。

弾丸のような（大げさじゃないと思う）速度で打ち出される。

俺の体はアニメのやられキャラが殴られ吹き飛ばすような水平角度で3秒とかからず、バルコニー正面の屋根へと運ばれた。

一瞬で迫る屋根、俺の思考は全くついていっておらず、普通なら確実に叩きつけられるはず、なのに音もなく華麗に両足で着地する俺。

えーと・・・？

身体能力が凄いのは分かった。確かにこの体ならビル8階から飛び降りても大丈夫なのかもしれない。

しかも体が勝手に動いて制御してるといっつか、なんだこれ。

《だから言ったじゃろ、大丈夫だと。まあ今は良い、さっきの部屋から離れるように屋根沿いに真っ直ぐ進め。突き当りを左じゃな》

さっきのバルコニーに中世の兵士っぽい姿をした人が3人ほど出てきて何事か叫び出す。

やば、ここじゃすぐ見つかるな。

俺は大日如来の言うとおりにバルコニーから離れる方向へ屋根の上を走りだす。

体が自然と中腰のような姿勢となり、その上早い。

ふと自分の体を見るとさつきは血で赤黒く染まった服も、闇に溶けるような漆黒になっている。

うーん、ファンタジー？

おそらく短距離世界記録保持者より早い速度（しかも足場不安定な屋根の上）で疾走するとすぐに突き当たりが見えた。

左に折れてさらに走る。全く速度が落ちる様子も息切れする様子もない、が勝手に動いてるような自分の体。

実は凄く気味が悪い。何だろこの違和感は。馴染んでないだけなのか？

《よし、次の突き当りの建物を登れ。なかに入らず外壁からの。一番上の階にいたら窓が空いてるから中に入れ》

ロープなしバンジーの後はロッククライミングやらせる気かよ。

まあ、たぶん余裕なんだろうな、この体。そんな気がするわ。

ちょっと思考してるとあつという間に建物にたどり着いた。

現在の高さビル6階辺り。その建物はさっきのバルコニーほどの高さだから1階分登るだけでいい。

だがとつかかりも何も無い壁だ、世紀の大泥棒が持つてるような吸盤型アイテムもないし、フック付きロープも持ってない。

・・・無理じゃね？

《壁に指を突き刺して登れば良からう。簡単な話じゃ。》

えーと、てい

ゾブツ

突き指にならない程度の強さで人差し指を壁に突き立ててみた、つもりだったんだが第二関節までめり込んだ。

やらかい壁だなあ・・・って多分違うんだよな？

もしかしてあれか、気功で体を硬くしてなんとか、とかそういうの。ええい、考えても無駄だ。俺は壁に指をゾブゾブ刺しながら壁を登っていく。

端から見るとどう見えるんだろうな？間違はなくうちの親父は笑うな。

あっさり1階分登りきり、近くの窓から中に侵入した。この階には扉が3つ。つまり3部屋か。

《向かって一番左の部屋へ入るのじゃ。この階には誰もおらんから心配はないぞ。》

大日如来様がいい終わるとほぼ同時に、外が急に騒がしくなった。どうやら本格的に俺を探し始めたらしい。

俺は急いで一番左の部屋へ入る。施錠されていたが、俺がノブを回すと

バキッ

って音がしてノブごと壊れた。この体に宿る恐ろしいほどのパワー・

丁度部屋の中に鏡があったのでちょっと覗いてみた。

おおよそだが、身長約180cm、筋肉質だがマツチヨってほどではなさそう。体重不明。

前の体より一回りぐらいは大きい感じだな。

全身黒装束、これじゃアサシンじゃなくてニン（略）
顔は見えないが瞳の色は深緑だった。ちよつと怖い。

顔を隠している布をずらしてみる。日本人じゃないな。髪は黒、線
は太め、眉も太め、鼻筋はすつきりしている。

精悍な顔つきだ。褐色の肌のせいで精悍さ2割増しだな。

……ってあれ？この部屋真つ暗なのに肌の色までハッキリ見える。
夜目が効くってやつか？

《自分の姿は後でじっくり見ると良いぞ。それより窓から外を見ると下に壁が見える。それが城壁じゃな。それを超えれば街に入れるぞ。みっしょんこんぷりーとは近い。しかし気を抜かず急げよ。》

俺は急いで飛び降りて、城からの脱出を果たしたのだった。

第二話 く身体能力をチェックしようく（後書き）

王様の名前は歴史上の人物とは関係ありませんのであしからず。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0607z/>

靈感持ちのアサシン

2011年12月3日15時55分発行